

1999年 2 月

口 演

S-277

285 生存率からみた子宮体がん検診の有効性評価

東北大,東京都がん検診センター*
北里大**,慶応義塾大***
中川智佳子,佐藤信二,吉田祐司,矢嶋聰
大村峯夫*,上坊敏子**,青木大輔***

〔目的〕子宮体がん検診の有効性を評価するために検診発見群、外来発見群の生存率を比較検討した。〔方法〕症例は20施設において1989年1月から1997年12月までに病理組織学的に子宮体がんと診断、治療された1440例中追跡が可能であった1398例を対象に発見契機、症状の有無、診断年月日、病理組織診断、進行期、転帰、最終生存確認日の調査をおこなった。発見契機別から外来（発見）群1110名（79.4%）と、老人保健法の枠内の検診を検診（発見）群133名（9.5%）として抽出し両群の比較検討を行った。〔結果〕①進行期分類（FIGO 1988）によるstage別の頻度は早期の病変の割合は検診群の方が外来群よりも高く、群間の分布には有意差があった（ $p=0.001$ ）。②病理組織学的分類では両群に統計学的な有意差は認められなかった。③類内膜腺癌の分化度の頻度は検診群の方が外来群よりも分化度の低い症例の割合が多く、群間の分布には有意差があった（ $p=0.02$ ）。④5年生存率では検診群（95.0%）が外来群（85.5%）より10%程度高く、両群の差には有意差を認めた（ $p=0.026$ ）。比例ハザードモデルを用いて検討した結果は外来群に対する検診群の粗ハザード比（95%信頼区間）は0.43（0.2-0.93）であり、外来群の予後が検診群より有意に良好であることが示された。年齢、地域で補正した補正ハザード比（95%信頼区間）は0.47（0.2-1.0）、 $p=0.053$ だった。〔結論〕検診群の子宮体がんは早期で分化度の高いものが多く、また5年生存率でも有意に高率であった。

286 新規アルカロイド,コノフィリンによる子宮体癌細胞の接着・浸潤能の抑制効果とその機序

足利赤十字病院
入江琢也,隅田能雄,桃井満礼,東口敦司,
春日義生

〔目的〕近年、癌の転移を抑制する転移抑制物質の開発が望まれている。ras発現細胞の形態正常化を指標として新たに精製・抽出されたコノフィリンは*in vitro*においてラットのK-ras発現細胞の細胞増殖に影響を与えずに浸潤能を抑制することが知られている。従って、コノフィリンは細胞殺傷性の少ない転移抑制作用を有する物質として期待される。そこで今回我々はコノフィリンがヒト子宮体癌細胞の増殖・接着・浸潤に与える影響を検索するとともに、その作用機序について検討した。〔方法〕ヒト子宮体癌由来株SNG-IIの培養液中にコノフィリンを添加し、①MTT法にて細胞数の変化、②固相化したマトリゲル、コラーゲンタイプIVへの接着、③Boyden Chamberを用いた*in vitro* invasion assayにて浸潤細胞数、④フローサイトメトリーにて接着分子CD44、インテグリン β_1 、E-カドヘリンの発現をそれぞれ解析した。〔成績〕①SNG-IIはコノフィリン濃度0.03~0.3 $\mu\text{g/ml}$ までは細胞増殖に変化は見られなかった。細胞増殖に変化を与えないコノフィリン濃度において②固相化したマトリゲルおよびコラーゲンタイプIVへの接着細胞数は濃度依存的に減少し、③マトリゲルへの浸潤細胞数は濃度依存的に減少した。④コノフィリンの添加によって、SNG-IIのCD44およびE-カドヘリンの発現はコノフィリン非添加群と比べ減弱したが、インテグリン β_1 には変化が認められなかった。〔結論〕コノフィリンは子宮体癌細胞SNG-IIの*in vitro*での細胞外基質への接着や浸潤を抑制することを明らかにした。またコノフィリンがSNG-IIにおける接着分子CD44およびE-カドヘリンの発現に影響を与えている可能性が示された。